

# 北部九州に遍在する山笠の都市・集落特性に関する考察

## 一 祭礼の伝播と咀嚼

上田 祥史

### はじめに

博多祇園山笠は博多・福岡を代表する都市祭礼であり、その名が示すとおり京都祇園に代表される正当な祇園祭の流れを受け継ぐものである。

しかし福岡から少し視野を広げると、北部九州には数多くの山笠が存在している。それも地方都市と呼べる場所から農村・漁村まで多様な場所に存在する。この山笠の分布に関しては福間裕爾の研究<sup>(1)</sup>が詳しく、山笠の分布にみる博多文化圏について言及している。

博多祇園山笠についての考察は本編に譲るとし、本梗概では博多周辺に伝播した山笠に注目する。個別に伝播した山笠を空間・社会の両面から読み解くことで、祭礼と地域の関係についての考察を行っていく。

### 1. 博多祇園山笠の概要

博多祇園山笠は京都祇園の早期伝播の一例とされ、祭礼行事としては都市の御霊信仰を基盤に持つ「夏祭り」に分類される。運営組織は祇園祭が伝播してきた近世初期の住民組織である「流」を基盤とするなど都市構造を反映したものであり、山笠はまさに都市に起源を持つ有形文化だといえる(図2, 3, 4)。



図1 博多祇園山笠

現在では近世からの都市骨格は事実上崩れ、山笠の体系自体も改変されてはいるが、新たに現在の都市の構造を写したものとなっている。つまり山笠を行うという行為が博多の歴史を刻み、過去から現在までつながった都市としての博多の姿を力強く表現している。

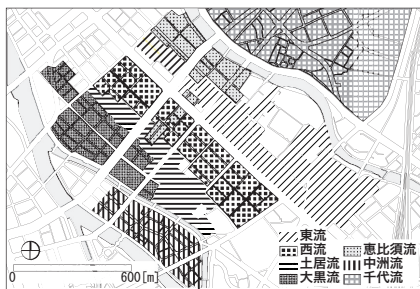


図3 博多祇園山笠流範囲

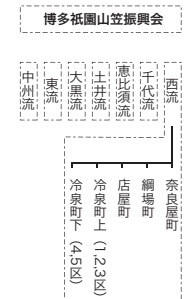


図2 組織関係図

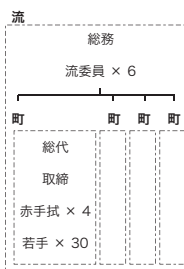


図4 組織表図

### 2. 周辺への山笠の伝播

九州各地を見渡してみると、北部九州を中心に数々の山笠が分布している。現在廃絶したもので含めると福岡、佐賀、長崎、大分の4県に100もの山笠が存在していたことが確認できた。

これらの山笠を山笠自体の形態から分類し、地図上に配置してみると、近世の街道沿いに山笠が多く伝播していること、福岡藩の境で博多系の山笠の分布が収まっていることなど、近世後期の地理が大きく影響している様子がわかる(図5)。それは大体において博多から周辺の地域へ山笠が伝播した時期が近世後期であり、山笠の伝播には強く当時の社会構造が影響していることを示している。

また山笠の伝播には、山笠の形態・民俗語彙等から博多を中心とする方向性を持った文化圏の存在を窺うことができる。博多周辺に存在する山笠は、博多祇園山笠をオリジナルとして、それを志向するように伝播したものだといえる。

### 3. 地域における山笠の咀嚼

本章では、博多周辺域に存在する祭礼の性格・地域特性の違う5つの山笠(表1)に注目し、各地域における山笠の変容について考察を行う。祭礼当日の現地調

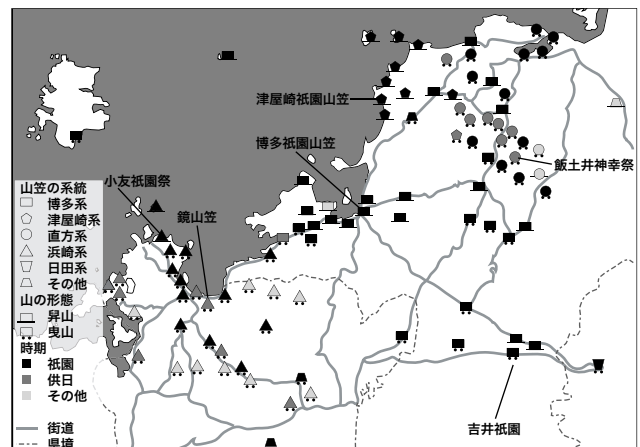


図5 山笠分布図(福間裕爾の調査結果をもとに作成)

表1 山笠の分布

名称	所在地	時期(日時)	集落	山	系統	人形師
博多祇園山笠	福岡市博多区	祇園(7/15)	マチ	昇山	博多系	博多
鏡山笠	唐津市鏡	供日(10月第3土日)	ムラ	曳山	浜崎系	浜崎
小友祇園祭	唐津市呼子町小友	祇園(7/30, 31)	ウラ	昇山	浜崎系	浜崎
津屋崎祇園山笠	福岡市津屋崎町	祇園(7/19に近い日曜)	マチ	昇山	津屋崎系	津屋崎
吉井祇園	浮羽郡吉井町	祇園(7/21, 22)	マチ	鏡山	日田系	博多
飯土井神幸祭	田川郡金田町神崎	供日(10月第2土日)	マチ	曳山	直方系	直方

査、文献調査、関係者各位へのヒアリングから祭礼の性格・構造と地域の都市・社会構造の関連を読み解き、変容した山笠が地域に対して持つ役割を明らかにする。

### 3.1. ムラの中の山笠

博多において都市祭礼として成立し、持続してきた山笠だが、博多から伝播した山笠はマチとは呼べないような集落のなかにも数多く存在している。都市祭礼がそのような集落のなかに取り込まれるには様々な変容が不可欠であり、その変容を読み解くことでその地域の特色を明らかにしていけると考える。

#### 3.1.1. ムラ風景の中の山笠：鏡山笠

鏡山笠は、一般に「鏡神社の例大祭として、旧暦の8月1日、八朔の節句に行われていたもので、一年間の神のご加護と秋の収穫を感謝するものである」とされ、実際にも農村的な祭礼の特色を強く持つ。

鏡山笠は境内での神事、餅撒きの後、御神幸行列が出発する。行列は先頭を賽銭箱が寄付を集めながら進み、その後山笠、神輿と続く。子供と親が参加者の大部分を占めるため鏡山笠は和やかな雰囲気進む。

また、東組・西組と地域を二分して行われる鏡山笠だが、組の範囲は地域内の人口の変動にあわせて再編される。運営組織(図7)でも名前こそ組毎に区別されているが、実際には共同の運営体制をとるなど、組は祭礼を円滑に行うために区分けされたもので、博多の「流」のような競争意識は存在しない。

鏡山笠は、山笠という飾りを導入しながらも、実際には平和的な農村集落の祭りとしての性格を受け継いだものだといえる。

#### 3.1.2. 漁村社会への適応：小友祇園祭

小友は古くから住民のほとんどが漁業に従事する漁村として成立していた集落である。そのため小友祇園祭の最大の特徴は、巡行中に山笠が海を渡ることであり、これは直接的にこの地域と海・漁業との強い繋がりを示すものである。

小友祇園山笠は近年まで青年会が一手にその運営を受けていた。現在では減少しているが、かつては集落のほとんどの男性が漁業に従事し、青年会に加入していた。加えて現在の主要漁業はイカ釣りとなっている

が、以前は鰯網漁で船団を率いて漁を行っていた。そのため現在よりも密接な集落内のつながりがあったといえる。また、現在では祭礼直前の準備のみが青年会の主な活動となっているが、かつては一年を通して祭礼の準備、その他の活動を行い、若者の生活に密接に関わっていた。組織的にも青年会は年功序列に作られるなど、漁労組合のように青年会内で集落の社会教育が行われていたといえる。また、祭礼行事に厄年に関わる役が多数あることも小友祇園祭の特徴である。

このように小友祇園山笠には通過儀礼的な性格を見ることができる。これは小友が漁業を唯一の生業とした集落であることが強く影響している。単一の生業で成立しているムラであることから、住民の成長も一つの軸に乗ったものであり、これが小友に伝播した山笠に通過儀礼的な性格を付け加えた原因だといえる。



図6 鏡山笠

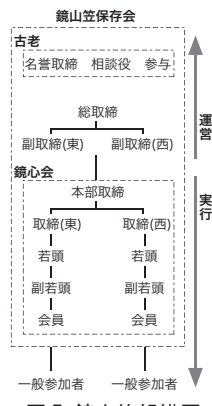


図7 鏡山笠組織図

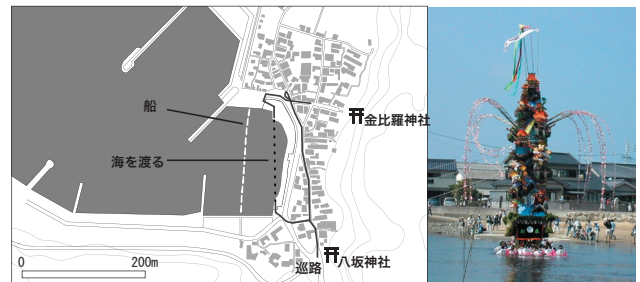


図8 小友順路図



図9 小友祇園祭

### 3.2. マチにおける山笠

山笠は、集落はもちろん博多周辺に位置するマチにも数多く伝播している。山笠が都市の祭りであることを考えれば、集落に伝播した山笠に比べその伝播における変容は小さいと考えられる。だが実際には博多のような都市的なマチは存在するわけではなく、博多祇園山笠の都市祭礼のある一部分の性格を残すも、大きくその姿を変えている場合が多い。ここでは博多祇園山笠に近い構造を持つ津屋崎祇園山笠と、全く博多とは異質の吉井祇園に注目し、博多の周辺のマチに伝播した山笠の姿を追っていく。

#### 3.2.1. 複合都市の山笠：津屋崎祇園山笠

博多祇園山笠は、都市の祭りでありながらその観客、また加勢と呼ばれる参加者に周辺の農村を取り込み、広域的・重層的な都市の様相を示すものとなっている。津屋崎祇園山笠は博多まではいかないものの、周辺農村も含む広域的な領域の中



図10 津屋崎祇園山笠

で、北流(ウラ)・新町流(マチ)・岡流(ムラ)の3流に分かれて祭礼を行うなど、博多祇園山笠に近い構造を持った祭礼だといえる。

今回調査した周辺の山笠の中で、祭礼時に注連縄が設置されていたのは津屋崎のみであった。祭礼当日に注連縄が確認された位置は図11のようになる。一見散らばっているように見えるが、これに小字の範囲、そして追い山時の順路を重ね合わせると、注連縄は町境の追い山が通るルート沿いに設置されていることがわかる。博多祇園山笠では注連縄が津屋崎よりも密に町境に設置される。これは博多祇園山笠では、町単位で山笠の責任を回すなど町の単位が流の組織の中で確立していることが原因だといえる。一方、津屋崎祇園山笠における町での行動は祭礼後の直会のみで、それ以外の行事はすべて流で行うことが注連縄の設置状況に影響しているといえる。より細かく観察すると、詰め所を各町ごとに設営する北流では注連縄はすべての町境にあるが、詰め所を2町合同で設置する岡流ではそのグループ境にのみ設置されることがわかる。また祭礼時に流の下に町の単位を持たない新町流では流の境界線上にのみ注連縄が設置される。

津屋崎祇園山笠のもう一つの特徴は、加勢町の存在である。津屋崎は北、新町、岡流のどれもが周辺の農村を加勢町としてもっている。これは、津屋崎が博多まではないかないもののこの地域の中心的・集積的な町として存在していたことの影響だといえる。かつての津屋崎は貿易港として宗像全域の中心であり、周辺の農村・塩田の消費地・出荷港として津屋崎と周辺の村の関係は強く、祭礼時にもその影響が現れたといえる。

近世より続いたこのような加勢町との固定的な“村対村”の関係は昭和38年の中断を機に消滅する。15年後に復活するときには、個人の繋がりによって加勢町が組織立てられた。この事実は現代の津屋崎はこの地域の中心ではなく、山笠も都市活動の一部ではなくなっていたことを示している。

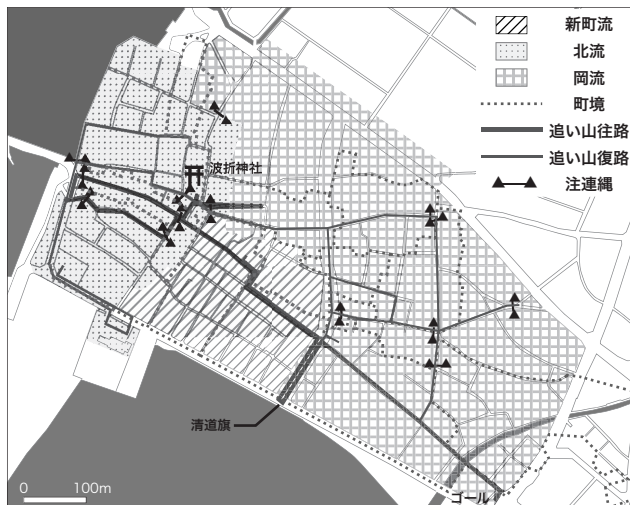


図11 津屋崎祇園山笠の流範囲・順路図

### 3.2.2. 復層形式山笠：吉井祇園山笠

吉井祇園山笠は、動くことのない飾り山である。現在では博多祇園山笠終了後に東流の人形を借りて山笠を作っているため、博多の飾り山笠に近い形になっているが、元々は全く違う形から発展したものである。



図12 s.33 四区山笠

吉井祇園山笠の初期の形は史料等が存在しないため判然としていないが、江戸時代中期に行われていた豪家の店の部分に人形を飾る、京都祇園に似た行為から始まっているといわれる。そしてその飾りが、次第に山笠の形になってきたという。その頃の山笠の形

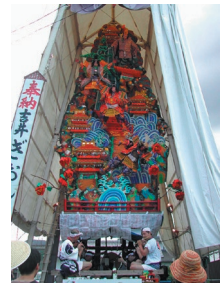


図13 h.16 四区山笠

式は、木彫りの顔とわらの体で制作された人形に茶釜を組み合わせて、地獄絵図を表現していたりしたようだ。それが明治になると、町の祭りとして吉井町全体を4区に分け獅子、御輿、山笠2台を行う現在の形になった。その後明治17年にそれまで飾り山笠であったものが、曳き山になり吉井町を巡行するようになる。その当時の史料より、曳き山は当初日田から人形師や囃子方を連れてくるなど、日田祇園をモデルとしていたことがわかる(図12)。

以降地元の人材が日田をモデルに山笠を建設・運営してきたが、昭和40年代に地元の人形師が消滅し、博多の人形師への交代が行われた。このときに博多の人形師と交わされたルールによって、曳き山笠を行うことが不可能になり、現在に至る(図13)。現在でもかつて山笠が曳かれていた頃の名残である車輪が山笠にはついている。

このように現在では博多の飾り山笠に近いものとなっている吉井祇園の山笠ではあるが、初源における山笠は全く異質のものであった。仮説だが、吉井祇園は元々が京都の祇園飾りを元にしたもので、博多からの影響は極めて少ないものであった。それが町の成長・改変と同時に日田をモデルに曳き山として動き出し、そしてまた飾り山に戻ったものである。飾り山に戻る際に、以前の姿に戻るのではなく、距離的には離れているがその頃もっともメジャーになっていた博多の飾り山笠をモデルにしたという事実は吉井祇園の特徴を示している。吉井には近世ではなく昭和中期に、山笠(飾り山)が伝播したといえる。

### 3.3. 現代における山笠の成立：飯土井神幸祭

飯土井神幸祭における山笠はもっとも若い山笠の一つで、神幸祭自体が昭和63年に始められたものである。元々は飯土井神社の境内で行われていた秋の収穫祭の神事だったものが、山笠の成立を機に神幸祭を行いだしたものである。

金田町大字神崎における山笠は昭和35年に神崎全体ではなく、地域内の神崎2区で開始された。まずは子供山笠として成立し、古くから山笠を行っていた大字金田の稲荷神社の神幸祭に加わるなどしていた。その後、鉦害復旧によって飯土井神社が新築されたのを機に、神崎1区4区でも山笠を建立、そして2年後には神崎3区も山笠を建立し、神崎全区の行事となった。その時もまだ神幸祭は行われておらず、山笠は各区域を巡り歩くと同時に、連れだって金田の町部にまで巡行を行っていた。その後昭和63年に神輿、御神輿殿、御旅所が作られ御神幸が行われるようになると、山笠は御神幸に伴うことになった。

このようにある区域の行事として行われていたものが、地域全体の祭りに拡大したものとして、飯土井神幸祭は独自の特徴を持つ。そして飯土井神幸祭は他の山笠にみられないほど、現代の地域の行事としての性格が強い。それは図14のように地域の組織がそのまま統合された形をとる山笠の運営組織や、行事の内容と

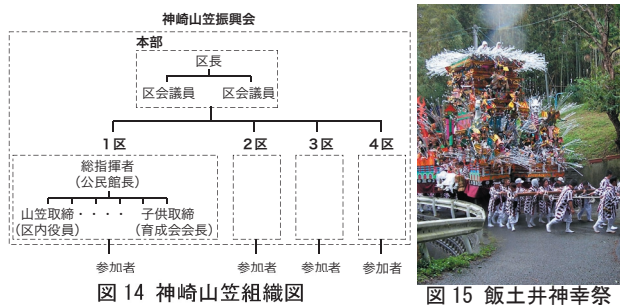


図14 神崎山笠組織図



図15 飯土井神幸祭

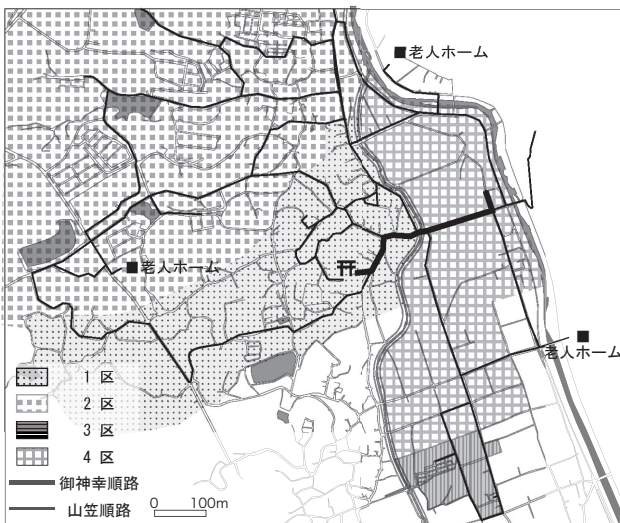


図16 飯土井神幸祭 順路図

しても御神幸以外に行われる地域内の巡行で新興住宅地、老人ホームを訪問することが山笠成立当初よりメインイベントとして成立している点に表れている。

これは神崎における山笠が、金田町の人口がピークを迎える年に生まれ、そして「赤字再建準用団体」が適用されるなどその衰退が明らかになった年に神崎全区の祭りとして成立したという、時代背景が深く関わっているといえる。飯土井神幸祭は、神事など伝説的な村の姿を描くものではなく、まさに昭和後期のこの地域を描くものとして成立している。

### 4. 山笠の現状にみる都市の変質

以上のように各地で成長してきた山笠だが、ある時期によって同時代的に各地の山笠に共通してみられる変化がある。それは第二次大戦のように日本中を不可避的に巻き込む事件であり、また日本の成長に伴い各地で行われた計画道路の新設など都市構造の変化に原因を持つものである。そして現在、同時代的に起きている変化があるとすれば、それは行政の祭礼への介入、山笠の「固形化」である。

現在、山笠が存続している多くの地域では行政主体のイベントが数多く見られる。これは実際に祭礼を行うのではなく、歴史的遺物・文化財として祭礼を展示するものである。これは文化財的な価値観を偏重した方向だといえるが、この考えは実際に山笠を行う人たちの間にも広く浸透し、現場における声すらも「山笠の文化財化」に集約されつつある。

これは現代の都市が、成長という変化が望めないときに、縮小再生産を繰り返す様子を表しているといえる。だが、祭礼自体にアクションが起こされている点でこれまでの変化とは一線を画す。

### まとめ

現在北部九州に伝播する山笠は、近世における博多文化圏の中で博多を中心に広がったものであった。だが、現在の山笠はそれぞれの地域で独自性を獲得し成立していた。そしてその多様性は祭礼の初源のみによって生じたものではなく、どの時代においてもその現在性が強く表れた結果だといえる。

その中で今の山笠を取り巻く状況には疑問を禁じ得ない。山笠とは、過去ではなく過去を引き継いだ現在ではなかったのだろうか。祭礼のなかで生き続けてきた歴史が分断するか否かは、現在の状況に強く基づいているといえる。

注1) 福岡裕爾 「都鄙連続論」の可能性—北部九州の山笠分布を中心に—、『福岡市博物館研究概要』第2号